

外国人 として 生きる

84歳、今が青春

オ・ボクトク タヒャンサリ
—呉福德さんの異郷暮らし66年

金美善 (キム・ミソン)
本館外来研究員



子育てが終わった頃、友達と一緒に奈良へ



来日前に故郷の友達と



夜間中学校の仲間と
博物館にて



デイハウスに集まった友達と(左手前が呉福德さん)

文字をしらぬ辛さ

しかし、子どもが生まれ、学齢期になると子育てでどうしようもないこともあった。呉さんが日本語の読み書きのできない非識字者であったことである。多くの在日コリアン一世、特に女性の場合、当時の経済事情や故郷の社会的慣習で学校教育に恵まれず、日本語の読み書きができない人が多い。呉さんも例外ではなく、韓国でも日本でも学校経験がない。そのため子どもの学校からの家庭通信や連絡が理解できず、学校への持ち物の用意をしてやれず、子どもには何度かわいそうな目にあわせたという。それほどではない。日本社会で文字の読み書きができないことは、単に情報入手の不便さという物理的な障害だけではなく、社会に対し劣等感と疎外感を感じさせるものでもあった。

子どもの学校行事や授業参観には仕事の忙しさにくわえ、恥ずかしさから参加できない場合も多くあったが、それでも呉さんがあきらめずがんばったのは、子どもの学校教育であった。子どもの将来を教育に託すと同時に、呉さん自身が学校教育の経験がないこと、十分に習えなかったためでもあった。それでも呉さんには、異国生活を切り抜ける特別な生活戦略があったらしい。子どもが、読み

書きができるようになると、学校行事や日程など書面の内容を親に理解させることから始まり、学校との書面でのやりとり、役所関係の書類上の仕事まで任されることになった。小学校低学年から子どもの役割は他の日本の家庭とは違い、社会的に弱い親を守ろうとする気持ちも育っていったようだ。

夜間学校との出会い

ところで呉さんの生活する平野区は、日本でも在日コリアンがいちばん多く居住する大阪市生野区と接する。天橋立から大阪に移ったのは夫の仕事の都合であった。大阪では夫を早くなくして、自営業の子どもの仕事を引退するまでずっと手伝った。日本語が読めない呉さんにとつて、複雑な都会生活はさらに大変だったという。買い物も、電車に乗るのも怖かった。

ところがある日、友達から読み書きを教えてくれる学校があると聞いた。中学校の夜間学校であった。戦後の混乱期に義務教育をうけることができなかった人たちを対象に設置された公立中学校の夜間学級であるが、外国人にも門戸が開かれ多くの在日コリアン一世の女性が在籍していた。六〇歳を過ぎてからの中学生、初めて学ぶ日本語の読み書きであった。やがて、ひらがな・カタカナを学

び、自分の名前が漢字で書けるようになったときの感激は一生忘れることができないという。ハンガルの読み書きを覚えるようになったのも夜間学校であった。授業が始まる夕方が待ち遠しく、よほどのことがない限り休むことはなかった。夜間学校で読み書きを身に付けたおかげで、やがて時間がかかるが新聞が読めるようになった。そして日記をつけたり、自分の思いを書いた作文が民族団体のエッセイコンテストに入賞したりもした。そればかりではない。今まではまったく無意味な世界だった街角の看板の内容がわかるようになり、子どもの助けなしに、一人で病院にも旅行にも行けるようになった。いつの間にか駅の周辺や街角にハンガルの看板が増えていることにも気づくようになった。自分の国のことばや文字が日本の看板から発見されたときは驚いて、うれしかったという。読み書きができるようになってから、いろんな社会の変化に気づくことができた。

変わり始めた日本社会

今考えてみると、呉さんの歩んだ日本生活は、日本の外国人の歴史だったかもしれない。来日当時の生活は、貧しさや社会的視線がとてつらく過酷でさえあった。過酷だったぶん、濃密な家族関係や共同体を保ち続けホスト社会に適

応する自助的な生活戦略を見せた。社会的弱者であったからこそ、感じる人情のありがたさも二倍である。日本語がわからなかったから助けてくれる人が多く、教えてくれた人も多かったという。とはいえず、植民地支配の時期、被支配者として来日し、生活してきた当時と今とを比べると、今の日本社会の彼女たちへの考え方や態度も大きく変わったと思っている。その裏づけだろうか、日本に生活する朝鮮半島出身者への呼称も何度も変わった。鮮人、朝鮮人、在日朝鮮人、在日韓国朝鮮人、在日、在日コリアン。これらの変化を一言で整理するのは難しいが、確かにいえることは、この社会が在日コリアンであることをネガティブに意識しなくてもいい方向に向かっていることだ。少なくとも呉さん自身は、自分が朝鮮半島の出身者であることを隠す時代ではないと思っている。それでも呉さんに「今が青春」を感じさせるのは、やはり楽観的で、前向きに、強く生きる彼女自身の性格にあるのだろう。そしておそらく、何千人、何万人の呉さんのような在日コリアン自身が今までの日本社会を変え、そしてこれからは変えていく原動力の一部となっていくのは間違いないようだ。